

2017年度 第2回例会
大学女性協会の今後を考える
—意見交換会—

日時 : 2017年9月9日 13:30~15:30

会場 : ウィングス京都

司会 : 浅井歩

参加者 : 15名

今年度第1回例会のテーマ『大学女性協会の今後を考える』を踏まえ、第2回例会では塩尻会員、浅井会員、女性研究者としてご活躍されている一方で3児の母でもある王柳蘭氏を迎えて協会の今と対策を考えるワークショップを開催。仕事に育児にと多忙な若い世代が魅力を感じ、自分の時間を割いて足を運ぶ会とはどのようなものか。より深く問題を掘り下げ、実行につなげられる様な具体策を模索した。

ワークショップ提案者



塩尻かおり氏
龍谷大学農学部
化学生態学



浅井歩氏
京都大学理学研究科
太陽物理学



王柳蘭氏
同志社大学グローバル地域文化学部
文化人類学

鈴木咲衣氏 (京都大学白眉センター・位相幾何学)

小山真紀氏 (岐阜大学流域圏科学研究センター・防災学)

(※提案者5名のうち、本日の出席は塩尻、浅井、王各氏でした。)

開会挨拶(松田支部長)

本日は、秋晴れの素晴らしい日に皆様の元気な姿を見せていただき嬉しい限り。

先日、協会のメインの事業である奨学生の推薦会を行った。どれも素晴らしいレポートで皆に贈りたい所だったが、この奨学金を将来に繋ぎ、活かせるかという点が票の違いになった。ささやかではあるが今後活かしてほしいと思う。塩尻さん、浅井さんも、本部募集の守田科学研究奨励賞を受賞され、見事に活かして頂いているので大変嬉しく思う。

我々京都支部は、経済、精神の自立をしている女性が共に集い懇親を深め、尚且つ社会や人に対する深い認識とささやかでも貢献できる会を目指したい。今日は支部を盛り上げる為、年齢と経験を重ねた人とこれからの人の意見交換に期待している。

支部長の挨拶のあと、例会の前日に新聞紙面を賑わせた太陽フレアについて、ご専門である浅井氏が分かりやすい解説をして下さった。

太陽は高温(プラズマ状態)のガスの塊で、常に爆発を繰り返している天体。爆発一発がなんと水爆100万発分!!今回はその中でも十年に一度と言われる大規模な爆発で、その爆発に伴い宇宙空間にガスが流れ出したのである。

それが地球に向かってやってきた為、大きな磁気嵐が起こる可能性があった。地球到達までの2日間にシミュレーションをした結果、それほど大きいものではない事が分かった。理由としては、地球の周りにある磁力線(固有の磁場)は南から北に向いているが、今回北向きの磁場がやってきた為である。

普段は、いいお天気ね♪と気楽に見ている太陽。このようにお話を伺い裏の顔を見たような気がした。とにかく出てくる数値が大規模で気が遠くなりながらもロマンを感じ、研究に没頭されている浅井氏の気持ちが非常によく分かった。

大学女性協会の今後を考える

趣旨説明

以前から「若手の会員を増やしたいが、そのためには何が出来るか。」という声があった。しかし、若い世代は忙しく、斯様な会に参加するのは大変である。そこで、入会のメリットを明確にするため双方の意見のマッチングを図りたいと思う。3月の例会では各会員がそれぞれ良いと思う意見をまとめているが、一方で若い世代が本当に欲しているものが伝わっているかが問題。女性協会側が若者にとって魅力的なものを提示することにより若者が積極的に入りやすくなるのではないかと。

王さんをはじめ、若い世代の意見を紹介する事で困っている事を具体的に挙げるので、それに対して女性協会側が提供できる事をご意見いただきたい。

質問1 大学女性協会とはどのような集まりか

大学女性協会の目的は女性の高等教育の向上と男女共同参画社会の推進等であるが、個人ではどのように思っているか。(図1参照)

若い世代の現状、意見

①王柳蘭氏

◇略歴◇

神戸市生まれ。神戸女学院大学文学部英文学科卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程退学。

同大学院アジア・アフリカ地域研究科助教、同大学地域研究統合情報センター・日本学術振興会特別研究員 RPD を経て、現在は同志社大学グローバル地域文化学部准教授。人間・環境学博士(京都大学)

今日は私が日頃行っているフィールドワークと出産後に関心が湧いた女性研究者のネットワーク作り、そして私自身が展開している「生きづらさ学」を元に、大学女性協会との繋がりや女性自身のエンパワーメントに繋がる可能性はどこにあるかの問いかけをしたい。

厳しかった准教授までの道のり

私は神戸生まれで、父が台湾人2世、母が日本人の台湾人3世である。子供は13歳、8歳、5歳の3人。京大人間・環境学研究科で博士・修士課程を修了したが、助教から准教授に至るまでが非常に厳しかった。

現在の准教授職は定年まで安定しているがそれまでは任期があり、キャリアへの影響を考えると間を空けられないため任期中に準備をしなければならない。しかもこの期間に3度の出産、産休が入り、研究も中断せざるを得なかった。何とか大学に籍を残すため、大学にお金を払って研究員としての籍をもらったりもした。

男性が右肩上がりのキャリアパスであるのに対し、女性は足踏みも多く障害だらけ。子供もいつ産まれるかわからず、仕事も不安定で保障のない研究生活というのがネックであった。

人類学研究、フィールドワーク

私が台湾人3世で夫が中国人、中国と台湾人と日本の文化が併存した環境にいることもあり、移民問題に関心があった。大学では人類学のフィールドワークをやっているグループに所属していた。

(※フィールドワーク…ある調査対象について学術研究をする際に、そのテーマに即した場所を実際に訪れ、その対象を直接観察し、聞き取り調査や現地での史料、資料採取など学術的に客観的な成果を挙げる為の調査技法)

フィールドワークは東南アジア(タイ、シンガポール、マレーシア、フィリピン、ミャンマー)を中心に行ってきた。今後は特に中国系移民の住んでいる地域を対象に巡りたいと思っている

調査のテーマは『故郷から切り離された移民達のコミュニティはどのように再生するのか。』

今、シリアの難民、移民問題等もがあるが、その問題を中国からタイへ移り住んできた人達の暮らしに絞って調査してきた。例えば私の調査対象であるムスリムの人がいるタイのモスクに通ったり、インタビューしたり、独特の食文化の調査をして、タイの多文化環境、移民と宗教の関係を研究している。

研究者として、母としての苦悩

長男が1歳8か月の頃から海外の学会も継続しなければならず、祖母にも同行してもらい長男を連れていくが、ホテルで待たせる、知らない人と一緒にご飯を食べるなど、退屈で嫌な思いをさせてきた。その後次男、長女が誕生したことで調査経費が家計を圧迫。出張中は誰が子供の世話をするかが常に問

題となった。一度日本にいる夫に預けて2週間出張したが、家事がろくに出来ず夫も子供も疲労困憊。結局連れて行くことに。しかし子供は成長と共に経費も上がってくる。この厳しい現実の中でどの様にフィールドワークを回していくかが切実な問題である。

経験を支援に

この厳しい状況をなんとかしたいという事もあり、女性研究者の世代間のコミュニケーション、情報交換と、女性の潜在的な能力と可能性を引き出してキャリアとライフの質的向上を目的とした「女性地域研究者のライフ・キャリアネットワークプロジェクト」を立ち上げた。以下はHPより抜粋した活動の意義である。

「女性研究者のライフ・キャリアネットワークプロジェクト」活動の意義・・・・・・・・

女性の社会進出、男女平等意識などによる啓発事業によって、女性地域研究者の置かれた環境はしだいに改善されている。こうした研究環境の改善と支援制度は、これまでももに行政や大学といった上位の支援機関が主体となって行ってきた。その結果、個々の女性地域研究者は、さまざまな支援制度を利用しながら、自助努力によって自らの研究基盤を整えることができた。しかしその反面、支援を必要としている者どうしの横の繋がりは十分には形成されてこなかった。また、社会進出の結果、すぐれた女性地域研究者が分野を問わず数多く輩出されている現実にも関わらず、身近に気軽にフェイストゥフェイスで相談できる先輩女性研究者やロールモデルとなる女性研究者は意外と少ない。その結果、若手研究者の間には人生と研究についての葛藤を処理しきれずに精神的に追い詰められ、自分の置かれた境遇を長期的なスパンで捉えなおす余裕を失い、孤立化し、時には命を絶ってしまうケースもある。

また、若い女性研究者にとって、とりわけ20代から30代は、出産の適齢期と重なる。そのため、院生時代を通じて研究を継続しながら、いつ結婚し、いつ出産するのか、果たして出産と研究は両立できるのかどうか、といった人生においてクリティカルな問題に直面し、大いに悩む時期を経験する。そのため、この時期には学業的な支援のみならず、精神的な支援がもっとも必要となる。本研究では、女性のライフ（命、人生、生活）と多様なキャリア（仕事経験）を対置させることなく、繋がりのなかでその充実感をみだし、さらに女性研究者間の交流、とりわけ、世代の違う女性研究者どうしの交わりを目的とし、その交流を通じて、女性の潜在的な能力や可能性を引き出し、キャリアとライフの充実、質的向上、女性間の相互支援となるプラットフォームを作る。とりわけ、先輩女性研究者との交流は幅広い視点から人生、研究をみつめなおす機会になり、いわゆる啓発的な支援事業とは異なった、より身近で頼りになる精神的なサポートとネットワークを生み出すことができると思われる。

こうした女性研究者の厳しい環境を整える為に実行したこと。

- ・ RPD 対策研究会の開催(※RPD…日本学術振興会が創設。優れた若手研究者が、出産・育児による研究中断後に円滑に研究現場に復帰できるように支援する制度)
- ・ 異業種異分野研究会の開催。
保育や環境教育の専門家と一緒に「持続可能な教育と環境とは」をテーマにディスカッション。
- ・ 妊娠中、育児中の女性研究者の学術的なサポート。
- ・ 女性地域研究者の世代間交流
先輩フィールドワーカーとの交流

生きづらさ学の立ち上げ

研究をしていく優秀な女性はあるが、その人たちが次の世代にサポートしてくれるわけではなく、その人たちがトップの役職に就いたとしても次世代に還元されるとは必ずしも限らない。それにより次世代も同じ課題に直面し苦しむという負のサイクルを断ち切りたい。そこでピンチをチャンスに変える事、イノベーションする事に可能性を見つけたいと思い集まったメンバーで **2014** 年から「生きづらさ学」と名付けて活動を始めた。

今まで取り組んできた問題

- ・ 苦しいと思っていることは視点を変えれば違う。
- ・ 自分の出来る事、出来ない事は、構造的に問題があるのではないか。
- ・ 色々な分野、視点から生きづらさを考える。

そしてその後、生きづらさ学創設に向けて、下記のワークショップを開催した。

第1回

幸せとは。生きづらさとは何かを違う角度から見るワークショップ

- ・ 災害研究から見た生きづらさ
- ・ 高齢者から学んだ事
- ・ 家族のケア
- ・ 仏教思想から見た幸福度とは何か。

女性研究者の生きづらさを出し合う。

- ・生きづらさは自己責任だけなのか？
- ・育児が出来ないのは家族だけの問題？
- ・日本社会全体で引き受けるべき問題ではないか？

参加者は20~30名で、多くは育児中の女性研究者だったが、男性も引き込み女性の問題でなく、社会全体の問題として取り組んだ。何が苦しいかを付箋に書き、カテゴリ別に掲示する形で纏めた。

そして2016年には、生きづらさを見える形で説得しなければならないと考え、多分野の専門家の話を聴き問題を多種化していった。

その後は、実際に生きづらさの支援をしている現場の話(成年後見の現場、障害学生支援の現場)を聴き、改善の為の場所と方法について知恵を出す事が必要だと認識した。

大学女性協会との連携

大学女性協会の方々には、その時代においてパイオニア的存在。経験値を積んできた世代であり、京都を拠点に国際的なネットワークを基にしたグローバルな活動をされている。

そこで私達の職場である京都の大学と大学女性協会の繋がりを作り、女性が解決に寄与出来る課題とどういう分野があるか。世代間で積み残してきた課題が無い情報交換をして共有することで次世代の為に二の足を踏むことを避ける事が出来るのではないかと思う。

質疑応答

◇子供が成長し、学校の行事等が増えてきた際はどうしたのか。

- ・海外出張等、家庭の都合に寛容な学校を選んだ。子供自身も小さい頃から同行しているので、自ら予定を申告してくれている。

◇夫の関わり方はどうなっているのか。

- ・夫自身は家事をしようとしているがしない。できない。自分の研究優先になるので議論中。

◇周りの助けのない人はどうしたらよいか。

- ・今はサポートがどこかに無いか話し合っている。

②塩尻かおり氏の意見

本当は海外でもやりたいが、4人の子供がいる為2年間フィールドワークに行けていない。しかも研究対象が植物であるため限定された時期に行かなければならず、学校行事等と重なってしまう。夫は外国

人で言葉の壁もある為預けては行けず、イライラ感もある。

大学女性協会と生きづらさ学の連携に関する小山氏の意見(メールから抜粋)

- ・大学女性協会の秩序やルール、旧来の組織運営の常識を「事」にすることと、組織本来の「目的」を表に出した上で、「目的」と「手段」があっているか、これを素朴な視点で対話できると良い。
- ・別の視点で「見える世界」ってどんなものだろう？というワクワク感が欲しい。
- ・「学」性協会は国際組織で、ポテンシャルも「大きい」と思うので、世界との繋がりをどんどん進める上で、「躊躇」にできたらと思う。
- ・格式高いのはいいことだが、格式を守ることで実利を犠牲にする余裕は若者の女性にないと思う。「女性こそ、チャンスも少ないので、実利か面白さのどちらかが飛び抜けていて欲しい。」

意見交換

会員の意見

- ◇日本の男女は仕事が平等になる一方男女平等ではない。昔と違い安全も家族(主に祖父母)のサポートもない。そんな状況で外国であればベビーシッターを雇えるが日本は悪気を感じ、しかもお金も掛かる。
- ◇昔は田舎から出てきた優秀なお手伝いさんがいたが今はそういう社会構造や外国のような二重構造(貧富の差)もない。ベビーシッター等の専門機関を作らないと厳しい。
- ◇介護保険制度の様な形で、育児でもそのようなシステムを構築出来ると良い。
- ◇男性の女性の役割に対する意識改革。
- ◇ベビーシッターやお手伝いさんの職業に対する誇りを育てる必要がある。

王さんの意見

- シンガポールはメイド(ベビーシッター)が昔から導入されていた。国内に適当な人材がない場合は中国からベビーシッターの専門家が来ていた。
- シンガポールは大学にベビーシッターマッチングサイトがある。しかし料金が高く問題もある。
- 保育士に対する世間の評価は低い。

質問2「大学女性協会」が提供できるリソースは何ですか？

若手の意見を聞いて、どの様な仕組みがあれば若手の実利に繋がるか等のアイデアを挙げてもらった。

(図2参照)

若い世代を取り込む為の具体案

- ・ 食事、ケーキ作り、手芸教室、ヨガ
- ・ 時短術や家事やりくりのレクチャー
- ・ 読書会、交流会 ・子供連れが可能な場所、子供も楽しめるイベント
- ・ 女性研究者支援の拠点を構築。
- ・ 現代は生活の知恵をネットからでも入手出来るが、実践で得た経験を直接聞く方が納得出来る。
- ・ ネットワークの窓口
- ・ 外から来る女性の支援(ケア)

閉会挨拶(高橋副支部長)

今までの例会とは雰囲気も違い、内容も未来へ向けた話ができ、非常に明るく楽しい会になったと思う。今までの会では出なかった問題も出たし、我々が会を続けていくについても示唆を頂いた。これからもご協力いただき、会員増加につなげて行きたい。

【図1】

大学女性協会はどういう集まりだと思いますか？

女性の地位向上

自立した女性たちが交流を深め、世の中に貢献する。提言する。
男女共同参画の理念のもと、女性の縦と横の繋がりを構築する会
色々な意味でお互いを高めあう。
例会に出席する意味はその時々では掴みにくい。何回か出席する事によって何かを得る事が出来ると確信している。
女性の地位向上の為勉強をする
女性の地位向上、男女共同参画に対する基礎知識、基礎能力を養う様勉強する必要がある。

女性支援

女性が、自分のやりたい仕事ができる様な環境作りを外部に働き掛ける。
現状はややエリート女性の集まりになっている。出身大学の偏り等。理想としては働く女性の困難な状況の助けになれる集まりになること。

教育支援

若い研究者を育て、彼女達の力が社会に役立つよう協力する。
高等教育を受けた同志が集まり、それぞれの資質の向上を図り、その結果として何らかの社会貢献ができれば。

自己啓発

現在の社会問題(政治・経済・科学等)について全員で考え・勉強する。
自己啓発、啓蒙の場
社会奉仕の場・私達が受けて来たものを還元
例会で幅広い知識や経験を得て地域社会に活かす。

「大学女性協会」が提供できるリソースは何ですか？

国際交流

若手がワクワクする事は何か聞きたい。
私は国際交流という目的で外国人に家庭を開放する事で実践してきました。
外国からのお客さんが来る時に参加してもらおう。

ネットワーク
形成

各大学の女性と課題を共有する場を提供

各大学の困っている女性たちを招き、会を持つ。
若い人が増える事でこの会を通じて高齢者を含めての情報交換、意見交換出来ればワクワク感も双方に生まれる。

JAUW 本部に育児をしながら国際の仕事
を継続している人がいる。そういう方の社会的環境条件を詳細に聞き、我々に適用出来る有用な方策を研究し、会全体の要求として外部へ行動。

意見交換

家庭生活支援

家庭円満	夫婦で参加して意見交換をする会を持つ。
	会員による子育て相談。 家庭円満のコツ。
子供のサポート	子育てが終わり、パートにでる女性の職業の1つとしてベビーシッターになる教育機関を作る事は出来ないか。
	働く女性の育児、家事をサポートするとは？ 他の企業のように海外から安価で信頼できる人材を雇う。 国が組織的に子供を見る受け皿を作る。
	子供を預かる。
	若い人たちの子育てを何らかの形でサポート 興味のあるイベントの開催。
産休制度への提言	産休の期間を長く取れる制度を提案したい。

経験値の提供

問題解決における経験からの回答の提示。

若い人は何をしたい？

若い人は研究を離れて何をしたいか。